悩まんと 頼りにしてや 弁護士を“ひとりやない”
大阪弁護士会 総合法律相談センター TEL 06-6364-1248

OPINION SLICE
オピニオン・スライス

芸人・タレント

ハイヒール・リンゴさん
High heel, Ringo

土曜日の朝の情報番組でMCをつとめるハイヒール・リンゴさん。旬のニュースを分かりやすく、お笑いの要素も盛りだくさんのツッコミなど、口の速さ、頭の回転の速さに引き込まれます。今年はハイヒール結成40周年ということで、これまでのご苦労や女性として思うこと、パートナーのことなど、色々お聞きしました。

漫才師になったきっかけ

── 大学在学中にNSCに入られて漫才師になられたのですね？

私は漫才師を目指していたわけではなくて、深夜にラジオを聞いていたので、ラジオのパーソナリティーになりたかったんですよ。ラジオのパーソナリティーを輩出している大学にと思い、京都産業大学に入ったんですけど、色々先輩に聞いてみると、大学に行くだけだったらそういう仕事にはつけないのだとわかって・・・。それで大学の帰り道に京都花月の前を歩いていたらNSCという吉本総合芸能学院の１期生を募集する看板があったので、DJコースに応募したんです。ところが、いざ入ってみるとDJコースがなくなっていて、「漫才」、「新喜劇」、「歌手」、「その他」しかない（笑）。お笑いの方とパーソナリティーの方と一緒に番組することが多かったし、間とか掛け合いという意味で言ったら漫才のコースが私の希望に一番近いのかなと思って漫才コースを選んだんです。当時「NSC寄席」という寄席があって、NSCの生徒がネタをするんですけど、その時に今の相方のモモコを紹介されて１回だけのつもりで一緒に漫才をしたのです。見てくださった社員の方からアドバイスをもらったりして、「今度なんば花月出てみるか」と言われて、なんば花月に出て、「じゃあ次、梅田出るか」、「じゃあ次、京都出るか」と言われて、今年で40年です。

── NSCは１学年何人ぐらいいたんですか？

400人位受験して200人位通ったと思います。

関西には、お笑いの基盤というものがあって、お笑いをしたいけどどうやったら弟子になれるのか分からないというような人が多かったのでしょうね。そして、学年で一番面白いと言われているか、クラスで一番面白いと言われているような子がNSCに来るんですよ。

学校の側も手探りだったと思います。今でこそ芸能学校みたいなのはどこのプロダクションもしていますけど、当時は、そういうのは師匠から学ぶものという時代だったので、学校制度にするというのは、やっぱり画期的だったと思います。NSCでは殺陣を当時のチャンバラトリオ師匠が来て教えて下さったり、紳助・竜介の紳助さん、さんまさんが来て下さったり。笑いの仕組みや自

分の今までしてきたことなど、貴重なお話をして下さいました。

女性の芸人として感じたこと

―― 芸人さんの社会って男社会だと思われますが、ご苦労はありましたか？

私達が入ったときは、衣装も自前でしたし、メイクさんが付き出したのも毎日放送の「４時ですよ～だ」という番組が始まってからですね。花月の楽屋は男女一緒だったし、トイレも全部男女一緒だし。だから、女性で着替える方は、バスタオルを２枚縫って首のところにゴムみたいなのが付けてある、プールのときに着替える、ああいうので楽屋で着替えられていました。私はそれが嫌だったので、ひとけのない客席のおトイレで着替えたりしていました。

女性だからと、いじめられることはなかったですね。ただ、NSCだからと言われたことはあります、それは。やっぱり今までの徒弟制度でやってこられた先輩方から言うと、自分のお弟子さんも大切だし、学校から来た子は礼儀も知らないし学芸会みたいだと思われていたようで。それがこっちは新しい笑いとか息巻いてやっているわけじゃないですか。そうなるとやっぱり師匠方の中に快く思わない方がおられるのは仕方のないこと。ただ、「これからは若い子が頑張らないとあかんねん」と言って下さる師匠もおられました。

―― セクハラはありましたか？

私達の先輩の時代はあったみたいですけど、私達の時代はもうなかったですね。例えばお弟子さんとかが集まったら、「ハイヒール・リンゴ」と「今くるよ」だったら、どっちと付き合えるとか。そんなのはありましたけど（笑）。今映画の世界で起こっているようなことというのは、すごい古い体質のことだなと思います。

最近、女性が社会に出る機会は増えてきましたが、ただ、やっぱり女芸人は40年経っても芸能界の中での地位が変わっていないと思うんですよね。男のお笑いって「面白い」が「カッコイイ」の一つになっているんですよ。それはモテる要素。ところが「面白い」は、女のモテる要素ではないのです。男のお笑い芸人って、例えば女子アナと結婚したり、女優さんと結婚したりがあるけど、女の芸人ってないじゃないですか。歌舞伎役者さんと結婚したとか。だから私が今、目指していることは、後輩たち、面白い子が沢山いるから、世の中にもっともっと認知されるように、女芸人の地位を上げたいと頑張っています。

朝の情報番組で心掛けていること

―― お笑いの方がニュースバラエティの司会をされることが増えていますね。読売テレビの「あさパラ」はファンでいつも見ています。難しいニュースでもすごく分かりやすく話されますが、コツとか心掛けておられることとかありますか？

あの番組が始まって26年くらいですが、私が一番初めのプロデューサーに「ニュースがやりたい」と言ったんですって。その当時、朝の情報ニュース番組というのは、ほとんどやっていなかったので、家族で見られるものというか、ニュースを楽しく分かりやすく解説したいと言ったそうです。覚えてないのですけど（笑）。

「あさパラ」は月曜日から金曜日まで忙しくされている方に土曜の30分、１時間で１週間のニュースが分かるというのがコンセプト。だから、月～金でそのニュースを知らない人も知っている人も見られるというところにお笑いの要素があったのだと思います。知らないことを本当に知らないまま聞いたら、賢（かしこ）の説明は難しいんですよ。賢い賢（かしこ）の説明は賢い人にしか分からない。普通の人にはその説明では分からないんですよ。だから、私達レベルの言葉に通訳するということを心掛けています。ちょっと偉そうですが（笑）。あの番組は、手の内を言うと、スタッフがすごいんです。土曜の朝の番組ですが、水曜日の晩から中身のやり取りをしています。水、木、金でやり取りして、土曜の朝に最終稿が入って。だから担当ディレクターも２時間位しか寝てないような感じで。あの番組を愛してくれるスタッフに恵まれていると思います。歴代のプロデューサーが自分の代でもっと良くしようと思ってくれて、スタッフとのコミュニケーションも良くとるようにしています。本当にスタッフには頭が下がります。

―― ニュースや新聞はいつもチェックされているんですか？勉強する時間は確保できますか？

常にチェックはしています。どちらにせよ勉強しないといけないのだ

から日々しておいたほうが楽でしょう（笑）。自分でニュースを読むときに心掛けているのは、ニュースを「知る」ことは簡単なことだと思うのです。どうしてこんなことになったのか、そのための歴史とか、背景を考えこれからの展開を予想する癖をつけないと。それは訓練というか、練習というか、意識しています。勉強の時間は、劇場の合間の時間や移動の時間、メイク中、何か読んだりとか、いくらでも時間は作れる。ただ、私達は時代的に紙で見たいんですよ。紙で見て大事なところに線を引いたりとか。でも、今の若いマネージャーとかはデータで送ってくるから（笑）。

それからやはりバラエティーなのだし、私はお笑いの人なので、人が亡くなったニュース等はなるべく扱わないようにしています。そこは、やっぱり傷つく人もいるから。

―― 毎週土曜日の朝は、早くからスタジオに入られるんですか？

楽屋に入るのは遅いですね。一番遅くて８時半ということも。楽屋だと人が入って来たりして、集中して資料が読めないので、朝、最終メールが５時前後に来るので、それをプリントアウトして１回熟読して、毎週ディレクターが変わるので、そのディレクターの癖、「この人、こういうネタ好きだよなあ」と思ったら、できるだけそのネタを残して、そのディレクターのキャラクターが生きるように心掛けています。そんなに時間がないのに、あえてそのネタを強硬にしたとしたら、自分のことを理解しようとしてくれているのだと感じて、次回も又、頑張ってくれるから。それぞれディレクターの癖を把握するのも楽しいですよ。

共演者との事前打ち合わせは15分ぐらいで、それは特に役者さんの方などは最初にちょっと声を出しておかないと本番でぱっと当てられたら、「うっ」となってしまう方もおられるので。事前アンケートもスタッフが聞いてくれていて、軽いたたき台本もあるのですよ。

基本ウケても滑っても「笑い」に変えるのが私の仕事です。だから私はMCというのは、交通整理だと思っているんです。整理してご出演していただいている皆さんの意見を聞くというのが、MCの仕事だと思っているので、滑った子には、滑った子というか、少し笑いが足りなかったりなどしたら、フォローしたりツッコミを入れたり、賢い人の言い回しが難しかったら、それを私達レベルでも分かるような言葉にするというのが、私のあの番組での仕事だと思っています。

ワークライフバランスについて

―― お仕事で大変お忙しいと思いますが、ワークライフバランスを意識されたり工夫されたりしていることはありますか？

コロナ禍になるまでは年に２回だけ長期の休みを１週間くらいもらっていたんですよ。で、そこで旦那さんと海外旅行に行くようなときは、もう完全に仕事フリーで、その期間、絶対マネージャーも電話してこない。マックス10日間くらいですかね。レギュラーの関係では２回連続休めないので、隔週レギュラーとかを工夫して。

コロナ禍になってからはもう海外とかは全然行けていないし…それで、ネコちゃんを家族に迎えたのです。結構家に居られるんだと気づいて。ペットOKのマンションなんですけど、今まで留守がちだとペットがかわいそうだと思っていて。ペットを飼おうかというときになって、うちの旦那さんがネコちゃんを飼いたいと言い出して。実は、私はワンちゃんを飼いたかったのですが、でもまあ１泊２日で旦那さんとちょっと温泉でも行こうかとなったときもネコちゃんならそのくらいであればお留守番できると聞いたので。

不妊治療のこと

―― リンゴさんの人生において大きな要素を占めたであろう不妊治療についてお話いただけますか？

不妊治療は15年くらいしました。私は投薬で体調が悪くなることはほとんどなかったんです。だから続けられてしまったんですけど、もうやめ時が分からなくなったんですよ。スケジュールの調整でまわりにすごい迷惑かけて、で、これ妊娠というゴールをしないと、まわりに更に心配と迷惑をかけてしまうと思ってしまって。このままだとやっぱり仕事に差しさわりがあるし、不妊治療っていうもの自体そんなに市民権がない時代だったし。だからとりあえずお仕事を休んで受けたいときに治療が受けられるような状態にしようって思ったのです。

―― テレビに出ていらっしゃる方が１年半、レギュラーをやめて不妊治療に専念するのはものすごい覚悟ですね。

そう、悲壮感が漂っていて。だから、もう戻るときに「赤ちゃんはできませんでした」では戻れないみたいな。その間、台湾で初めて体外受精を成功させた先生にもお世話になりました。３か月くらい台湾に住むことになったのですが、その方が気持ち的には楽でした。日本にいたら、あそこに居たとか、ここで見たとか。色々言われ気を遣うくらいなら、私のことを誰も知らない台湾に行って治療したほうがいいと思って。台湾では「日本で何の仕事をしているの？」と聞かれたら「女優」て言ってました。分からないだろうと思って（笑）。

―― 最近は専門医も増え、不妊治療を受けられる人も増えていますが、リンゴさんの目から見て問題と思うことはありませんか？

それは山のようにありますよ。まず治療の金額をもう少し明瞭にしないと。やはり病院側の言い値になっていると思うのです。全部が全部とは言いませんが、います。「先生、高いです。もう少しなんとかなりませんか？」と言ったら治療の手を抜かれるのではないかっていう根拠のない恐怖があるじゃないですか。実際そんなことないにしても。やっぱり不妊治療にかかる費用のことは一番大事だと思います。今は私がしていた頃よりリーズナブルになっているようですが。

―― 他にはどんな問題がありますか？

私達の時代と今は全然違うと思いますけど、やっぱり周りの理解。女は、「結婚は？結婚は？」と言われて。結婚したら、「子どもは？子どもは？」と言われて。「男の子います」と言ったら、「女の子ほしいでしょ？」て。もう一生言われ続けるんですよ。男の人ってそういうことを言われ続けるってないと思うのですが。

それから大事なのはパートナーの理解。不妊て、だいたい50％くらい男性にも原因があるのです。例えば、精子があまり活発な動きをしていない人とか、極論で言うとつらいですが無精子の場合もあるのです。でも女の人が全部調べて、何も問題がなかったから「あなたも調べてみて」、ここで初めて男性も検査に行くんですね。女の人て、生理周期があるから、この時期には調べられないこと、この時期だけ調べられることって沢山あるんですよ。男の人が最初に１回行ったら、それでわかることなのに、なかなか行動に移さない。

私の不妊治療に関しては、旦那さんがよく我慢してくれたと思いました。15年。なぜなら旦那さんは、自分はバツイチで子どもがいるんですよ。年を重ねて行くと、精神的にどんどん負担になってきてもおかしくはない。私が50歳で治療を卒業

したときに、もし子どもができていたら旦那さんには62歳の時の子どもなのです。それでも一言も「もう止めよう」と言わずに最後まで協力してくれましたから。むちゃくちゃ感謝しています。

―― お家にもよく芸人の後輩の方とか来られたり、色んな面で理解のあるパートナーなんですね。

家に遊びに来た後輩が、私と旦那さんが話しているのが面白いから、「旦那さんも一緒にご飯に行きましょう」て言うので、だから旦那さんも後輩達と一緒にごはんに行くんですよいつも（笑）。まあ、私が言うのもなんですが私にないものを全部持っているんです。うちの旦那さんは。

喧嘩をしていても、絶対に「いってらっしゃい」と「おかえり」は言う事にしています。子どもがいないから、子どもの話が会話のきっかけにはならないけど、喧嘩しても、「いってらっしゃい」と言われて、「はい」と言うと、そこから「何時に帰るの？」とか会話になるじゃないですか。仲直りじゃないけど、会話をつなげられる。２人しかいないから、「いってらっしゃい」と「おかえりなさい」「おやすみなさい」「おはよう」ていう基本的な挨拶は絶対にすることにしています。

―― 不妊治療が保険適用になりましたね。

随分変わってきました。昔は体外受精しておなかに戻したら、「お姫様の２週間」と言って、何もしない、出来ない、着床までの２週間があったのです。それこそ自転車を漕いだらいけない、階段を登ってはいけない。ところが時代は変わって、今は「普通」にしていれば何をしても良いという。泳いでも走っても良いという先生もいらっしゃる。不妊治療もどんどん変わってきていますね。有難いことに世の中が「不妊治療」を理解してくれる時代になったのです。例えば私の時代、治療で迷惑をかけるのが嫌だったのでイレギュラーの仕事、ロケなどを見合わせていたら、「リンゴさんはロケが嫌い」とマネージャーの引継ぎの時に言われていたようです。これは治療のことをちゃんと言って、ちゃんと休んだほうがいいと思いましたね。

―― 1年半仕事を休まれて、トータル15年の不妊治療は長かったですね。

私ね、まわりに恵まれていると思うんです。仕事１年半も休んでも戻れたのはやっぱり相方のおかげです。相方が「ハイヒール」として

「あさパラ」も続けてくれていたし、ラジオも続けてくれていたし。その当時あったレギュラー番組を全部一人で続けてくれたんですよ、「ハイヒール」て名前で。だから1年半で「戻ります！」と言って戻ることが出来たのです。これは奇跡。マネージャーもスタッフも待っていてくれた。本当に相方、そして周りの人に恵まれていると感謝しています。

今年ハイヒール結成４０周年を迎えて

―― ハイヒールは今年40周年ということですが、長くコンビを続ける秘訣とかあるんですか？

それは元々モモコとは友達じゃないから。ハイヒールという商店を相方のモモコと二人で経営している感覚ですね。で、その商店を、吉本興業という商店街の中で角地の良いところに出したい。ならば今年の売りはこれですって、二人で戦略を立てていかないと駄目だと思うのです。友達だったらやっぱり甘くなったりなぁなぁになってしまったりするけど、友達じゃないからそこはうまくいくんですね。

スピリチュアルの世界で有名な江原啓之さんに、「あなたは自分の子どもはできないけど、たくさんの「子どもたち」に恵まれるよ」と言われたことがあるのですが、それは私が後輩に対して、女芸人の地位を上げたいと思って積極的に動いている。その後輩達が子どもたちなのかなと思うときがあります。

樹木希林さんが「時が来たら、誇りをもって脇へどけ」とおっしゃっていました。いつまでも第一線で中心じゃなくてもよいんだと。「私は整形もなんにもしないから、お婆さんの役っていうと私に回ってくるんだよ」と。誇りをもって脇へどくという表現、私はすごい好きだなぁ。

私、ラジオの仕事は本当に好きなんですよ。ラジオがしたくてこの世界入ったから。だから、ラジオの仕事はずっと絶やさずにやってきましたし、これからも続けたいと思っています。

―― コロナに罹られて、気付かれたこととか、変わったところとか、何かありますか？

私の症状自体はすごく軽かったのです。金曜日に陽性と言われて、土曜日に熱が出て、もう日曜日には平熱でした。味覚障害もなく、ほとんど何にもなかったんですけど。私が罹患した第６波は人数が多かったのでさほど感じませんでしたが、第１波や第２波で罹患された方は、どんなに辛かっただろうと気付きました。まず、一歩も家から出られない。

私の場合は、それこそマネージャーが玄関に必要な品物を買って吊るしに来てくれて。後輩の芸人に電話して、フライドチキンとか、買ってきてもらって。有難かったなぁ。人の優しさが心にしみました。

弁護士へのメッセージ

―― 最後に、弁護士に対して思っておられることをお聞かせいただけますか？

私、独身時代に中古のマンションを買って、そのマンションを結婚したときに賃貸に出したんです。そうしたら借り逃げ、夜逃げされて。そのときに初めて弁護士さんに頼みました。

弁護士の先生、特にテレビに出演されている方って、皆さんお話が上手なんです。だから、一般の方は、弁護士の先生は話し上手だと思っていると思うんです。でも、実は聞き上手なんですね、先生方は。やはり弁護士の先生はいろいろ事情を聞かないといけないから、いかに相手がおかしなこと言っていて話が逸れて脱線してもずっと聞いて下さるんですね。

一般の方が誤解しているのは、弁護士の先生は自分の味方になって戦ってくれると思っているけど、実はそうではなくて、弁護士の先生ってネゴシエーターなんです。だから相手の弁護士といかにうまく交渉するかという駆け引きだと思いますね。タフでなければならない。大変と思います、すごく根気の要るお仕事、本当に。頭が下がります。また何かありましたらよろしくお願いします（笑）。

2022年（令和４年）４月28日（木）

［インタビュアー：平野恵稔
太平信恵
飯島奈絵］

本インタビューの実施後、ハイヒール・リンゴ様のパートナーが急逝されました。
謹んで、お悔やみ申し上げます。また、リンゴ様におかれましては、深いお悲しみの中、原稿をご確認いただき本当にありがとうございました。